マダガスカル共和国
Republic of Madagascar

安定感を増した社会情勢のもと整備が進む投資環境

3月29日に行なわれたセミナーでマダガスカルの魅力と可能性を紹介するラナイヴォソン氏(中央)

ミラーナ・ラナイヴォソン氏
マダガスカル共和国　産業化・通商・民間セクター開発省
産業振興部 部長

Ms. Mirana Ranaivoson
Chief, Industrial Promotion Department
Ministry of Industrialization, Trade and Private Sector Development

東洋的な文化土壌を持つマダガスカル

アフリカ大陸の東に位置するマダガスカルは日本の皆さんには馴染みが薄い国かもしれません。しかし独立国家となった1960年以降、日本とは漁業を通じた関係を皮切りに、さまざまな交流を深めてきた歴史があります。

マダガスカルは、種の数で世界の90%の原猿類が生息するなど自然の宝庫として知られ、島固有の動植物は学術的にも古くから注目を集めてきました。

一方、黒人系、マレーシア系などといった人種構成、18部族からなる社会環境は、アフリカに位置しながらもアジア的な文化の香りを漂わせています。多くの人は特定の宗教の他に伝統宗教も信仰しています。

このことはマダガスカルの文化が多様性・柔軟性に富んでいることを物語るものだと思っています。そして、このような社会環境が人的資源の豊富さにつながり、近年投資対象国として注目を浴びているのだと思います。

マダガスカルの産業

マダガスカルの産業はバニラをはじめ、米、コーヒー、丁子などの農業、エビ、マグロなどの漁業、そしてチタン、ニッケル、コバルトなど鉱業がこれまで大きな割合を占めてきました。しかし、近年工業化が進み、繊維分野では品質面への高い評価から、アメリカ向けを中心に輸出が大きく伸びています。

また産業基盤整備に遅れを取ることなく知的財産保護制度を整えるなど知的所有権への対応にも積極的に取り組んでいます。

整備が進む投資環境

97年3月に世界銀行と構造調整に関する合意が成立して以来、産業基盤開発や投資環境の整備が急速に進められ、通信網はもとより、3万キロ超の幹線道路網、1,000キロの鉄道網、12の貿易港、5つの国際空港など、インフラ環境が大きく前進しました。

また2003年10月以降、10の省庁が共同歩調をとり、投資に関する行政側の窓口を一本化。GUIDE(Guichet Unique Des Investissements et de Developpement des Entreprises)を通じスムーズな投資手続きが行える制度も確立されています。

特に輸出加工地区では、5〜10年間の法人税免除、原材料輸入時の免税措置などの各種優遇措置がとられています。

今後も長年の日本との経済交流をますます深めるとともに、新たな日本からのビジネスへの参入を期待しています。

首都アンタナナリボ

マダガスカル共和国

首　都	アンタナナリボ
面　積	58万7,000平方キロメートル(日本の約1.6倍)
人　口	1,700万人
宗　教	キリスト教、伝統宗教 イスラム教
政　体	マーク・ラヴェルマナナ大統領
元　首	共和制
日本からの主な進出企業	守谷商会、伊藤忠商事 大豊建設、マルハ

セミナー会場で展示されたマダガスカルの特産品